

聖書：ヤコブ 2：20～26

説教題：行いによって義と認められる

日時：2017年9月24日（朝拝）

今日の箇所は「信仰」と「行い」の関係についての、ヤコブ書のメッセージの中心的部分です。著者ヤコブは、この手紙を迫害によって散らされたユダヤ人クリスチャンたちに書きました。彼らは自分たちが住んでいた町を追われて、新しい場所で経済的・社会的に困難な状況にありましたが、その彼らには人をえこひいきする問題があったようです。すなわち経済的に富んでいる人を重んじる一方、貧しい人たちを軽んじる姿があった。そんな彼らにヤコブは、その生き方は私たちの栄光の主イエス・キリストを信じる信仰と一致しない！と語っています。前回 18 節で見たように、ある人たちは「信仰」と「行い」は賜物の違いとして考えられるのではないかと思っていたようです。前回紹介した口語訳聖書で 18 節前半はこうなっています。「しかし、『ある人には信仰があり、またほかの人には行いがある』と言う者があろう。」すなわち、ある人は信仰を神から特別に与えられており、またある人は行いを神から特別に与えられているという風に考えられるのではないか。信仰と行いの両方を持たなければならないとするヤコブの立場は行き過ぎではないのかとある人は考えた。それに対してヤコブは「行いのない信仰は死んだものです」と言いました。今日の 20 節でも「ああ愚かな人よ。あなたは行いのない信仰がむなししいことを知りたいと思いませんか」と言います。そして本来の信仰のあり方を具体的な事例を通して示して行きます。彼は二人の人に注目させています。

まず一人目は「私たちの父アブラハム」。アブラハムは単にユダヤ人の父祖というばかりでなく、何と言っても信仰の父として特別の立場にある人です。その彼についてヤコブが注目させているのは、その子イサクを祭壇にささげた時のことです。創世記 22 章に記されています。それを指して、あの信仰の父アブラハムは「行いによって義と認められたではありませんか」と言います。ここにヤコブ書の特徴的な表現、「行いによって義と認められる」という表現が出て来ます。今日の箇所には 21 節、24 節、25 節と 3 回も出て来ます。この「義と認められる」という言葉で私たちが慣れ親しんでいるのは、もう少し違う表現ではないかと思えます。それは「信仰によって義と認められる」という表現です。ローマ書やガラテヤ書といったパウロの手紙に出て来ます。彼はそこで義と認められるのは行いによらず、ただ信仰によると言っています。いわゆる信仰による義、あるいは信仰義認の教理のもとになっている表現です。もちろんヤコブはこれ

と矛盾することを語っているわけではありません。そのことについては、後にそのことがもっとはっきり語られているところで触れますが、まずここで押さえておきたいのは、イエス様のお言葉です。マタイの福音書 12 章 35～37 節：「良い人は、良い倉から良い物を取り出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を取り出すものです。わたしはあなたがたに、こう言いましょう。人はその口にするあらゆるむだなことばについて、さばきの日には言い開きをしなければなりません。あなたが正しいとされるのは、あなたのことばによるのであり、罪に定められるのも、あなたのことばによるのです。」 イエス様はここで最後のさばきの日にその人が正しいかどうかを判断されるのは、その人の外側に現れたものを通してだと言っています。すなわち信仰と言うよりは、むしろ行いによってであると。ヤコブはこれと同じ視点に立って、今日の言葉を語っていると考えることができます。

元に戻りまして、ヤコブがここで取り上げているイサク奉獻の記事は皆さんも良くご存知のことと思います。イサクはアブラハムにとって特別の子です。75 歳の時に子孫を与えるとの約束を主から頂いて後、待つて待つて 100 歳の時についに与えられた奇跡的な一人子です。ところがその子を神はモリヤの山の上で全焼のいけにえとしてささげよと言われます。アブラハムはこれを聞いてどうしたでしょうか。創世記 22 章に記されている通り、彼は翌朝早く出発しました。そして主が言われた山の上で祭壇を築き、イサクをほふろうとしました。その時、「アブラハム、アブラハム」という天からの声がありました。主の使いは彼に言いました。「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」と。こうして彼に対する祝福の約束はいよいよ確かなものとして確証されました。その姿にヤコブは注目させています。彼はこれによって何を言いたいのでしょうか。それはアブラハムの信仰は行いのない信仰ではないということです。ここから「信仰」と「行い」の関係について、ヤコブは二つのことを 22 節で述べます。

一つはあなたの見ている通り、彼の「信仰は行いとともに働いた」ということです。アブラハムの信仰は、主を信じますと告白した後、何もしない信仰ではありませんでした。彼の信仰は行いと一緒に働く信仰でした。行いをそこに伴う信仰でした。それは常に行いと手を取り合って進む信仰でした。さらにもう一つヤコブは「信仰は行いによって全うされた」と言います。この「全うされる」という言葉は「目的に達する」という

意味です。すなわち信仰は信じたと言って終わりになるものではない。それは目標を持っています。具体的な形となって外に現れ出るべきものです。すなわちアブラハムの信仰は、あのイサク奉獻という行いにおいて具体的に表現されたのです。そのことによって彼の信仰の実体が明らかにされ、またその力が示されたのです。

そしてヤコブは 23 節のように言います。「そして、『アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた』という聖書のことばが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。」ここで引用されているのは有名な創世記 15 章 6 節の言葉です。アブラハムは主によって、外に連れ出されて、多くの星が夜空に輝くのを見ました。そして主が「これらの星を数えることができるなら数えなさい。あなたの子孫はこのようになる。」と言われた言葉を聞いて、「主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」と記されています。アブラハムは創世記 22 章でイサクをささげるよりもずっと前の時点の、この創世記 15 章で義と認められる信仰を持っていました。しかしヤコブが言っているのは、その義と認めたという聖書の言葉は、創世記 22 章のイサク奉獻の出来事において実現したということです。この「実現する」という言葉は「満ちる」という意味の言葉です。すなわちあの創世記 15 章で義と認められたアブラハムの信仰は、創世記 22 章の彼の行いにおいて十分に満ちた、満ち満ちた形となって現れたということです。ヤコブは創世記 15 章の時点でアブラハムが義と認められる信仰を持っていたことを否定しませんが、その信仰はあのイサクをささげた行いにおいて豊かに示されたと言っているのです。そしてこのような神との生ける信仰の交わりにアブラハムは生きたので、彼は「神の友と呼ばれた」と言われています。

以上のまとめとして 24 節には有名な言葉が出て来ます。24 節：「人は行いによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことがわかるでしょう。」これは見事なまでにパウロの言葉と対照的です。たとえばローマ書 3 章 28 節でパウロはこう言っています。「人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。」このため、宗教改革者ルターがヤコブの手紙を「藁の書」と評したことは有名です。ルターは、人は行いによらず、ただイエス・キリストを信じる信仰によって義とされるという信仰義認の教理を再発見し、この回復に努めましたが、その彼にとってヤコブ書のメッセージは、この大切なメッセージを弱めるもののように思われたのです。しかしパウロとヤコブは対立しているわけではありません。整理するとこうなります。パウロは救いの条件としての人間の行いを否定しました。

特に律法を守ることによって救われるのではないことを強調しました。人が救われるのはただキリストを信じる信仰によってである。その信仰を通して人は義と認められ、神との交わりが回復される。彼はこのようにして、どのようにして神との正しい関係に回復されるかという、いわば信仰の始まりに焦点を当てた言い方をしています。それに対してヤコブは救いの条件としての行ないではなく、救われた「結果」としての行いを強調しています。彼ももちろん救いはただ信仰によると信じています。しかし信仰は行いとともにおこなうものである。だから行ないがそこに伴わない信仰は、真の信仰とは言えないと言っているのです。24 節における「信仰」という言葉は口先だけの信仰という意味です。行いと区別された、頭だけの信仰のことです。それだけでは足りないと言っている。行いとセットになっている信仰、行いに現れ出る信仰を持っている人だけが、やがてのさばきの日に真に神の前で義と認められる人だと言っているのです。

もう一人の実例として 25 節でヤコブは遊女ラハブを取り上げます。彼女はアブラハムとあらゆる点で対照的な人です。まず女性です。また異邦人です。そして何と言っても遊女です。もしアブラハム一人を実例に上げるだけなら、彼はあまりにも特別な人過ぎて、私たちにはそのまま当てはめられないと思う人たちが出るかもしれません。しかしヤコブはこうして遊女ラハブをもう一つの例としてあげることによって、もし彼女にも同じ原則が見られるなら、それはすべての信仰者に当てはまることだと示そうとしています。ここで彼が述べているのはヨシュア記 2 章に出て来る二人の斥候を受け入れた時の話です。イスラエルは約束の地に入る前、二人の者を斥候として遣わして、エリコを偵察させました。その時、その町の遊女ラハブは二人をかくまい、この地の住民はみな震えおののいていることを伝えます。そして自らの告白としてヨシュア記 2 章 11 節でこう述べます。「あなたがたの神、主は、上は天、下は地において神であられるからです。」 さてこのような信仰の告白をした彼女はどのようにしたのでしょうか。彼女は二人の斥候を招き入れ、また別の道から送り出しました。彼女にはもう一つの道もあったはずですが。すなわちこの二人をエリコの町の当局者に引き渡すことです。まだ戦いはどうなるか分かりませんが、エリコが陥落しない可能性だって十分に考えられます。そんな状態でこの二人を助けることは大変なリスクを負うことである。それはやめておこう。そう考えることもできました。しかし彼女の信仰は生きた信仰だったので行動に現れました。そしてその行いによって救いに入る者、義と認められる者となりました。興味深い点は、エリコの住民たちも、イスラエルの神の卓越性を知っていたことです。そういう意味で彼らも神を信じ、震えていたのです。19 節に出て来た悪霊たちと同じです。しか

しそのような頭で知っているだけの信仰では役に立たなかった。彼らはエリコが陥落した時、みな滅んでしまいました。

最後の 26 節でヤコブはこう言います。「たましいを離れたからだが、死んだものであるのと同様に、行いのない信仰は、死んでいるのです。」 魂がなければ、いくらそこにかからだがあっても、それは死んでいて役に立たないのと同じように、信仰も、行いがそこになければ、死んだものだと言います。そのような信仰は無益なもの、役に立たないもの、あなたを救わないものだと言っているのです。

以上のヤコブの言葉は聖書の中でも特に貴重なメッセージと言うべきでしょう。ともすると私たちの信仰は頭だけのものになりやすいかもしれません。知的に知っているということだけで満足している。自分の罪を認めてイエス様にすがってさえいれば、それで良い。人は行いによらず、ただ信仰によって救われるとだけ聞いていると、イエス様を救い主として信じていれば、行いが必ずしもそこになくても良いと考えてしまうかもしれません。しかしヤコブはそうでない！と言っています。彼は「人は行いによって義と認められる」と言います。義と認められるのは「信仰だけによるのではない」と言います。この言葉にしっかり、正しく聞くことが大切ではないでしょうか。

もちろん私たちのすべきことは、人間的な行いを信仰に付け足すことではありません。仮に私たちがどんなに素晴らしい人間的行いをしても、それが聖なる神に義と認められるようなものにはならないでしょう。ヤコブが述べていることは、私たちが義と認められるのは、創世記 15 章 6 節で言われているようにただ信仰によるが、その信仰は生きている証拠が現れ出るような信仰でなくてはならないということです。本当に主を信じているなら、いのちの木なるお方につながっている者らしい実がそこに現れ出ていなければならぬ。私たちが自分をだますことがないように！偽りの安心感を抱いて誤った道を進むことがないように！いのちの木なる主にしっかり結ばれ、主のいのちにあずかり、主にあつて実を結ぶ信仰の歩みへ進みたいと思います。神が私にくださった信仰は、行いととも働く信仰、また行いによって全うされる信仰です。その信仰に生かしていただいて、かの日に御前で確かに義と認められ、この者に実を結ばせてくださった主にすべての栄光を帰す信仰者の幸いに歩んで行きたいと思います。